

# Nara Women's University

## 日本霊異記の表現をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 奈良女子大学21世紀COEプログラム 公開日: 2012-06-27 キーワード (Ja): 漢文, 日本霊異記, 和習 キーワード (En): 作成者: 出雲路,修 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10935/3146">http://hdl.handle.net/10935/3146</a>

## 日本靈異記の表現をめぐって

真宗大谷派毫撰寺住職・出雲路 修

**出雲路** ご紹介にあずかりました出雲路です。

『日本靈異記』についてお話いたしますが、「古代日本の散文をめぐって」という大きな枠組みの中でのお話です。『日本靈異記』は、ご存じのとおり全部漢字で書かれています。そうしますと、「日本古代の散文といっても、いったいどこに日本語の散文があるんだ。要するに中国語じゃないか」と。「どこが日本語なんだ」というご感想をお持ちの方が多いと思います。やはりこれは日本古代に作られた中国語の文章、漢文として理解するのが、まず常識的なところであって、それは間違いではないと思うのです。中国語なのです。

そして、『古事記』ですと、日本語の文章を漢字に直したという印象を受けますが、『日本書紀』とか『万葉集』とか『日本靈異記』になりますと、どこが日本語だと。すべて中国語であって、日本語らしい所といたしますと、『万葉集』だと和歌の部分、『古事記』だと歌謡の部分、『日本書紀』だと……。その話はあとから続けて致しますけれども、日本語らしい所が非常に少ない。はっきり言いまして、中国人旅行者といたしますと変な言い方ですけども、中国語しかできない人が日本をふらっと訪れて、各地の珍しい話を書き止めたものと何が違うのかといたしますと、「さあ、どうでしょうか」というところですが、それには大きな違いがあるということをごこれから申し上げたいと思うのです。

今、言いましたように、『古事記』を除きました『日本書紀』、『万葉集』、『日本靈異記』の日本の上代のこの三つは、やはりどう見ましても中国語の文章です。そして、新日本古典文学大系の『日本靈異記』の解説でも、これは中国語として、漢文として音読されて享受されたであろうということを書きました。

『日本靈異記』が音読されて受け止められたであろうという根拠は、二つ挙げておきました。一つは何かというと、文字が4字ずつに並んでいることです。四字熟語と言いますけれども、まさに中国語は四字熟語の世界でありまして、4字・4字・4字・4字と非常にきれいな文字のグループで全体ができております。そういった4字に切れるところは、単に視覚的な効果を狙ったものではなく、やはり読むときのリズムです。2プラス2で4になりますけれども、とにかく、この時代の中国語の文章の単位としては、4というのが基本的な文字数の単位としてあったと思われまます。それが基調になっているから、恐らく音読されたのだらうと。

もう一つの根拠といたしますのは、説話の終わりのほうに、ほめたたえるような言葉、「賛」があることです。要するに、説話の要約であったり、説話に登場したある人物をほめたたえたりするような文章が賛です。その賛がどうも韻を踏んだ形跡がある。韻をしっかりと

は踏まれていない所もあり、韻を踏もうとしてミスをしたような所もありますし、韻をし  
っかり踏んでいる所もあります。韻を踏むのは、音読するから意味があるので、音読しな  
かったら意味がないことなのです。だから、『日本霊異記』は音読されたのだろうと。

ともかく、文字が4字で一つの単位になっている文章が書かれていることと、贅が韻を  
踏まれていることから、音読されたのだろうと思うわけです。

そして、大事なのは、『日本書紀』にしる『万葉集』にしる『日本霊異記』にしる、いっ  
たんできた日本語の散文を中国語に訳したものとは考えにくい。考えられない。いきなり  
中国語の散文として書かれたものであろうと。これからお話しすることの前提として、そ  
ういうことを大雑把に知っておいてほしいということです。

これが中国語だとしますと、先程も言いましたように、もし中国人旅行者がふらっと来  
て、日本の珍しいお話を記録したということがありましたならば、その人はどういうこと  
をしてくれようか、日本の言葉とか日本の事柄をどういうふうに記録してくれようかとい  
うことを考える必要があります。そのために、こういうプリントしたものをお手元に持ってい  
ただきました。

まず最初に【1】、【2】、【3】、【4】と挙げてありますが、この【1】、【2】、【3】、【4】  
は、大体、中国語しかできない人が日本のものを書いたとき……（これは、例としてイン  
ドの言葉で書かれた仏教経典を中国語訳したもの、いわゆる漢訳仏典を資料にしておりま  
すものですから、インドのことが多いのですが、……）要するに中国語にとっての外国語  
を書くときに、どんな手があるか、どんな方法があるか。それまでのいろんなものをまと  
めると、こういうことになるかと思ってまとめました。

【1】 鷺鷺子 舍利子 舍利弗	Sāriputta (skt.Sāriputra)
大飲光 大迦葉 摩訶迦葉	Mahākassapa (skt.Mahākāśyapa)

ともかく、翻訳ですから丸ごと訳すのです。当たり前のことですが、丸ごと訳すのです。  
その訳す範囲が、われわれよりももっと広く訳してしまうのです。つまり、固有名詞も訳  
すのです。その訳し方は、しっかり訳すのです。例えばエドモン・ダンテスを團友太郎と  
訳すのではなしに、Smithさんを鍛冶さんと訳すような方向の訳し方です。意味を取って、  
そういうふうに丸ごと訳すのです。そういう訳し方がされる。それが一応の基本です。

その例として挙げましたのが、「鷺鷺子」と「大飲光」です。「鷺鷺子」。鷺鷺というの  
は鳥です。サギの一種だそうですが、その鳥の子。あるいは「大飲光」。光を飲むと書いて  
ありますが、その大きいもの。どう大きいのかよく分かりませんが、そういうふうに固  
有名詞を訳してしまう。最初の「鷺鷺子」の原語はシャーリプッタ、あとの「大飲光」は  
マハーカッサパです。そういうふうにして丸ごと訳す。

ところが、固有名詞の場合は、一部分だけ元の発音を残す、音を表示するということが

行われました。その例が2番目に書いてある「舍利子」と「大迦葉」です。漢字を発音記号風に使って、シャーリの所を「舍利」と表してある。プッタは、子供という意味ですから、プッタの所だけ「子」と訳してある。マハーカッサパのマハーは、大という意味ですから「大」にして、カッサパは、漢字を発音記号風に使って「迦葉」とした。

それから、丸ごと発音記号風に漢字を使って、「舍利弗」とか「摩訶迦葉」というふうにする例もあります。

そういうふうに【1】、【2】、【3】と並べておきました。いろいろあるということです。だけど、いろいろあると言っていたのでは学問になりません。「こういうのは、いろいろありますね」「そうですね」で終わってしまうと、楽でいいですが。

【2】 仏駄跋陀羅訳《大方広仏華嚴經》入法界品 [大正9・717・b]

若有衆生、阿梨宜我者、得撰一切衆生三昧、

若有衆生、阿衆鞞我者、得諸功德密藏三昧、

法蔵《華嚴經探玄記》卷一九 [大正35・471・a]

『阿梨宜』者、此云『抱持〔捺〕摩触』、是撰受之相故、得彼三昧也、『阿衆毘』者、此云『鳴口』、得言教密藏之定、

(中村元《東洋人の思惟方法》〈シナ人の思惟方法〉)

[《決定版 中村元選集》第2巻242ページ]

【2】は、固有名詞ですら全部訳す方向があったのですけれども、翻訳する人が特別に気になった言葉、気に掛けた言葉、関心を持った言葉がどういう言葉であるか、それは個別にいろんな場合がありますが、それを発音記号風にして残してしまう。

そこに書いてありますのは、『大方広仏華嚴經』入法界品の例ですが、これは中村元さんの『東洋人の思惟方法』の「シナ人の思惟方法」の所から出しました。「若有衆生、阿梨宜我者、得撰一切衆生三昧、若有衆生、阿衆鞞我者、得諸功德密藏三昧」とありますが、その「阿梨宜」とか「阿衆鞞」というのは、元のインドの言葉の発音をそのまま、漢字を発音記号風に使って表わしたものです。原音には、ちょっと分からないところがあります。特に「阿衆鞞」のほうは分からないところがありますが、そのインドの言葉を翻訳せずに、元のかたちのまま出した。

なぜ元のかたちのまま出したかといいますと、次に法蔵の『華嚴經探玄記』から注を出しておきましたけれども、要するに「阿梨宜」というのは「抱いてさわる」という意味で、「阿衆毘」というのは「キスをする」という意味だと書いてある。「仏道修行に励んでいるお坊さんたちが日常に目にするお経に、こういったことがあってはいけな。仏道修行の妨げになるだろう」と翻訳者が気を利かせまして、ここの所を原語のまま載せたわけです。

そうすると、またお坊さんは勉強熱心ですから、「特別に翻訳していないこの言葉は何だ

ろうか」と。われわれですと、昔の戦争中の本なんかには伏せ字があります。その伏せ字を勘定して、「ああ、これはこうだな」と。そういうふうに、かえって変な興味を引き起こすようなものであったろうと思います。ここにこういう注をしっかりと付けてありますから、何の意味もありません。隠すことはなかったような感じがします。

こういうふうに、どの言葉に関心を持って、どの言葉が発音記号風な表記で書かれたかというのは、個別にいろんな事情がありますが、こういった場合は、元のかたちを保存することが重要なのではなしに、翻訳しないことが重要だというケースだと思います。これは、いろんな場合があっただろうと思うのです。こういった例をいっぱい見つけますと楽しいです。

こういった例を見つめますと、『古事記』の研究者には非常に有益だと思うのですが、『古事記』の研究者は、「シナ人の思惟方法」に指摘されているこの例すら引用なさっておられません。ご存じでないのでしょうか。似たような例をもっといっぱい探したいものです。

### 【3】玄奘訳《般若波羅蜜多心經》

[大正8・848・c]

即説呪曰「揭帝揭帝 般羅揭帝 般羅僧揭帝 菩提僧莎訶」

こういうふうに、特別に関心を持った言葉は翻訳せずに済みます。特別な関心というのもさまざまですが、【3】のこれは、おなじみの「揭帝揭帝、般羅揭帝、般羅僧揭帝、菩提僧莎訶」。これは、皆さんご存じの『般若心經』とは、使っている文字がちょっと違うと思います。これは『大正新脩大藏經』から引用しておきました。『大正新脩大藏經』の文字遣いは、こうです。これも、特別に翻訳しないことに意味がある。元の言葉を出すことにも意味がありますし、翻訳しないことにも意味があると考えられたからだと思います。中国人旅行者が日本へやってきて、日本のものを何か記録しようと思ったときに、日本語に対して【1】、【2】、【3】のような接し方があった。中国語を書く場合に、こういった接し方があったということです。

### 【4】懺悔

知礼《金光明經文句記》卷三上

[大正39・112・b]

然『懺悔』二字、乃双举二音、梵語『懺摩』、華音『悔過』、

【4】は、もっと例を思い付く方がおられると思いますが、私がとっさに思いついたのは、これだけです。「懺悔」という言葉があります。これは知礼の『金光明經文句記』から注を引用しておきましたが、この「懺悔」の2字は、すなわち両方の音を挙げてあるのだと。上の「懺」は、サンスクリットの言葉の音を漢字で示し、下の「悔」は「悔過」という中国語です。だから、これは国語学の方がご存じの、いわゆる「文選読み」です。イン

ドの言葉と中国の言葉を合体させています。中国では全部「悔」という字で書き、これではいいのでしょうか、その「悔」をいろいろ下位分類しまして、インドで「懺」と言っている「悔」、という意味合いだと思います。そういうふうにかかれた文選読みの表記の仕方もあるということです。

ごちゃごちゃしましたけれども、もしも中国人旅行者が日本へやってきて、日本の言葉や日本の事物を記録しようと思ったら、この【1】、【2】、【3】、【4】のような漢字の使い方でも記録することができたであろうと。そして、まさにこの【1】、【2】、【3】、【4】に見えるようなことが『万葉集』の歌の部分であり、『日本靈異記』の歌の部分であるということです。『日本書紀』の歌の記録の仕方は、ちょっと性格が違いますけれども、【2】とか【3】に近いものです。

だから、『日本書紀』にしる『万葉集』にしる『日本靈異記』にしる、古代日本の散文と言いますが、要するに中国語です。書かれている歌は、いかにも日本語っぽく見えますけれども、中国人が日本語の言葉を記録する方法にすっぱり入ってしまうようなものであろうということです。

【2】の所を見てもらえば分かるのですが、「阿梨宜我者」とある所の横に棒線を引いて、発音記号風に使われた漢字とそうでない漢字を区別しておきました。しかし、この区別がない場合、中国語は漢字ばかりが並びますから、どこがもともとの意味を取って読めばよいのか、どこが発音記号風に用いられた漢字なのかという識別が非常に困難である。困難というよりも、できません。それができないために、妙な誤読をした例を挙げておきました。

## ■《法苑珠林》和刻本

〔刊記「寛文九年己酉仲夏吉日 書林村上平楽寺 刊行」〕

放生篇 - 引証部 所引《僧祇律》(《摩訶僧祇律》卷五)

(いま、このテキストに付された訓点にしたがって訓みください。歴史的かなづかいに統一して表記して示す)

仏 諸比丘に告げたまはく「過去世の時香山の中に仙人の住処有り。山を去ること遠からずして一の池水有り。時に水中に一の鼈有り。池水を出でて食す。食し已りて日に向ひて口を張りて眠る時に香山の中に諸の獼猴有り。池に入りて水を飲む。已りて岸に上りて此の鼈の口を張りて眠るを見る。時に獼猴便ち姪法を作こす。即ち身生を以て鼈の口中に内る。鼈覚めて口を合して穴を甲裏に蔵すこと故の如くす。

所説の偈に言はく〈愚癡の人 相を執すること、猶ほ鼈に噛まるるが如し。摩羅の捉らふるを守ることを失す。斧にあらずんば則ち離れじ。〉……」

「愚癡人執相 猶如鼈所噛 失守摩羅捉 非斧則不離」

「愚癡の人が相に執られるのは、ちょうど鼈に噛まれたり、鱔魚（失守摩羅Śisumāra）に捉えられたりしたようなものだ。斧でもなければ切り離すことはできないのだ。」

『法苑珠林』の和刻本から引用しております。これは、昔、中央公論社の「大乘仏典」の『法苑珠林』の巻の月報に書いたもので、そこには二つ指摘してあるのですけれども、そのうちの一つです。『法苑珠林』の寛文9年版とありますが、なぜこれを取り上げたかという、たまたまうちにあったからです。

『法苑珠林』は中国の唐の時代のもので、全部漢字で書かれている。それに訓点とありますが、返り点が振られ、仮名が振られている。その仮名を基にして訓み下すと、次のようになっている。これは「放生篇引証部」という所に引用されている『摩訶僧祇律』という書物の文章ですが、それを書き下して示しました。

「仏、諸比丘に告げたまはく」。お釈迦さんは、お弟子さんにおっしゃった。「過去世の時、香山の中に仙人の住処有り。山を去ること遠からずして一の池水有り」。山の近くに池があった。「時に水中に一の鼈有り」。亀の仲間で鼈というのがいた。「池水を出でて食す」。食べ物を食べた。「食し已りて日に向ひて口を張りて眠る時に」。この鼈は食事が終わり、腹の皮が張れば、目の皮がたるむというあれで、おなかがいっぱいになって眠った。その時に「香山の中に諸の獼猴有り」。猿がいっぱいいた。「池に入りて水を飲む」。猿が池に入って水を飲んだ。「已りて岸に上りて此の鼈の口を張りて眠るを見る」。この鼈が口をぐっと広げて眠っているのを見た。

こういう女性の多い所では、なかなか話がしにくいですが、そんな話をプリントしたのが悪いのですから一気に読みます（笑い）。「時に獼猴便ち姪法を作こす」。非常にむらむらという気持ちを起こした。「即ち身生を以て鼈の口中に内る」。「身生」というのは男性性器ですが、そういう用例は見たことがありません。『中国古代名物大典』には、「身生」ではなく「身命」というのが出てくる。文字的には、それが近いような印象を受けるのですが、それは男性性器を示すものです。それを「鼈の口中に内る」。馬鹿なことをする猿です。「鼈覚めて口を合して」。口をぐっとつぐんで。「六を」。「六」というのは、亀は蔵六です。両手、両足、頭、しっぽの六つを言うのですが、それを「甲裏」、甲羅の内に「蔵すこと故の如くす」。きゅっと縮めた。猿は、びっくりしたわけです。

そのあとに偈が説かれる。「所説の偈に言はく。『愚癡の人、相を執すること、猶ほ鼈に噛まるるが如し。摩羅の捉らふるを守ること失す。斧にあらずんば則ち離れじ』」。この和刻本の『法苑珠林』では、このような訓点が振られています。愚かな人が相にとられることは、鼈にかまれるようなものだ。摩羅が捕らえられたのを「守ることを失す」というのは、どういうことかよく分かりませんが、そういうふう書いてある。斧で切らないと、もう離すことができないと書いてあります。

ところが、これは大変な誤読です。元の所説の偈は、次に書きましたように、「愚癡人執相、猶如鼈所嚙、失守摩羅捉、非斧則不離」と書かれています。3句目に「失守摩羅捉」と書いてあります。和刻本の『法苑珠林』は、ここを「摩羅の捉らふるを守ることを失す」と訓んだのです。ところが、実は「失守摩羅」というのは、これで一つの単語であって、鱈魚という動物の名前なのです。「摩羅」なんて出てきません。「失守摩羅」という動物が出てくるのです。そして、意味的には「愚癡の人が相に執られるのは、ちょうど鼈に嚙まれたり、鱈魚に捉えられたりしたようなものだ。斧でもなければ切り離すことはできないのだ」ということです。

ところが、この「失守摩羅」というのは、どこまでが発音記号風に漢字が使われているのか、どこまでが漢字の意味を取って読めばいいのか、分からないのです。これは、べたべたと書かれると絶対に分かりません。だから、この『法苑珠林』の訓点を打った人は、ここを変に誤解したのです。この人にとって知っている単語は「摩羅」だったのです（笑い）。だから、まさにそこにとらわれて、そこを中心に変に返り点を打ってしまったわけです。

『万葉集』とか、漢字で書かれたもので、外国語の音を発音記号風に漢字を用いて表記した言葉を含んでいるような文献を読むときは、これに似たような間違いがどうしても起きるはずで、それは、どうしてもやむを得ないことです。今、【1】、【2】、【3】、【4】と外国の言葉を表記する方法を見ました。そして、犯しやすいミスを『法苑珠林』で示しました。『日本書紀』、『日本靈異記』、『万葉集』、『古事記』では、こういったやり方で日本語が表記されていった。

ただ、『日本書紀』は漢字の「おん」を使って……。 「おん」というのは音です。わざわざ言うのは、実は私は北陸の人間です。北陸の人間がしゃべりますと、イントネーションとかアクセントが関東の人間とも一致しませんし、関西の人間とも一致しません。だから、言葉をうまく聞き取ってもらえず、非常に基本的な言葉が通じない場合がけっこうあります。

今、先程のちょっとした会話をふと思い出したのですが、「水金地火木土天海冥」と習ったか、「水金地火木土つ天海冥」と習ったかというので、私は「土天海冥」と習った。もう1人の人は「土つ天海冥」と習ったみたいです。それで、『土つ天海冥』は関東風なんだ。『土天海冥』は関西風なんだ」と、先程、話をしておりました。

実は昔、私たちが学生のころに、「題名のない音楽会」に犬養孝さんが出てきました。あの人は関東のお生まれでしょうか。あの人が助動詞の活用を言った時に、私は驚愕しました。どう言ったかといいますと、「てっ、てっ、つ、つる、つれ、てよ」と言った。私は「てえ、てえ、つう、つる、つれ、てよ」と言っていました。「うわあ、すごいんだ」と思った。まさに文化の違いです。「こんな人に話をしても通じない」と（笑い）。

私は、日本語の発音をあまりちゃんとしゃべる人間ではありませんから、イントネーシ

ョンとかアクセントの面で非常にお聞き取りにくい面がありますが、「おん」というのは音です。ご存じのように、音を発音記号風に使うことを音仮名と言いますが、『日本書紀』は音仮名ばかりです。

■固有名詞以外の音仮名で、歌以外の本文に用いられているもの

「本垢」

(下巻第三八縁)「反故」

あとはどういうことがあるかということをもまず説明します。『日本霊異記』で音仮名風に使われているのは、この1例といますか、固有名詞以外では。『日本霊異記』では、固有名詞には音仮名風に使われている文字がいっぱいありますし、歌にもいっぱいあります。歌でもない、固有名詞でもないのは、この「本垢」と書いた「反故」の1例です。

この「反故」という文字遣いは、中国のものにいろいろあるらしいということは、いろんなものを書いてありますが、記述が一番詳しいのは物集高見・高量の『広文庫』で、やたら文献を引いています。あの辞書は大好きです。中国では、「反故」が普通の書き方みたいで、それに似たような発音の字を持ってきて示したのが『日本霊異記』に見える「本垢」という字です。

ところが、「本」と「反」、「垢」という字と「故」という字は、中国では発音その他声調も違います。日本の音仮名は、中国の発音そのものを使っているわけではありません。日本における類似音といますか、似たような音を使っております。だから、違っております。

■…景戒…(黑板本《金剛般若経集験記》)

「境界」

その次に引用しておきました「景戒」という言葉が出てくる文献には非常に珍しいものがあります。これは20年近く前に書いたことがあるのですが、だれもお読みになっていないみたいですが、黑板本の『金剛般若経集験記』には、「境界」とあるべき所に「景戒」が当てはめられている。「景」と「境」、「戒」と「界」は、中国では発音も声調も全部一緒です。だから、『日本霊異記』の著者の「景戒」は、「境界」の字のごとく発音すれば、一番正確だろうと。「境界」は、普通、仏教語としてどのように読むのが通行しているかということ、「きょうがい」と読むのが通行している。だから、『日本霊異記』の著者は「きょうがい」と読むべきだと言いました。しかし、どなたも従ってくださっていない説です。

「きょうがい」にこの字を当てたのは、中国風な当て方です。全く同じ音の字を当ててあります。日本の音仮名は違うのです。音仮名は、どの字とどの字が通用する通用しない、交換可能である可能でない、というグループ分けが、中国の漢字音のグループ分けとは、全くということではないですが、かなりずれがあるものですから、中国音で音を表示して

いるわけではない。日本人の考えた漢字音で表示してある。だから、はっきり言えば、音仮名であっても、これは日本風なのです。

### ■固有名詞以外の訓仮名

「江（え）」

（上巻第二縁・上巻第四縁）

「三（み）」「見（み）」「女（め）」

（上巻第四縁）

次に、固有名詞以外の訓仮名ですが、『日本靈異記』に見えるのは、これだけです。「江（え）」、「三（み）」、「見（み）」、「女（め）」。この「江」、「三」、「見」、「女」という漢字は、これで日本語の「え」を表し、「み」を表し、「み」を表し、「め」を表すものですから、こういうものを発音記号代わりに使ったわけです。「音仮名ですと、中国語しか分からない人にも分かる。訓仮名だと、そうではない」という変な考え方がありますが、そうではありません。音仮名であろうが、訓仮名であろうが、要するに日本風なのです。

例えば「あ」という字を「あ」と使うのであれば、中国の人にも分かるのです。問題は、nとかngとかmとかpとかtとかkで終わっている漢字音があるのです。それをカットして、一つの発音の文字のように使う。例えば「安」という字ですが、「安」と書いてあるのを「あ」の字として用いるというのは、下のほうをカットしているわけです。「英」の字を「あが」に使うのは、「が」というng音を音節化している。そういったケースは、中国語しか知らない人に分かるとは思えない。1音を1音にするのは分かりますが、1音を2音に用いている万葉仮名がけっこうあります。憂鬱の「鬱」の字と「瞻」という字があります。これを二つ合わせて「鬱瞻（うつせみ）。憂鬱の「鬱」を「うつせみ」の「うつ」に当てている場合がある。あの「うつ」という当て方で、中国語しか知らない人があれを「うつ」だと分かるということは、非常に考えにくいことだと思います。ごちゃごちゃ申しましたが、1音のものを1音に使うケースは、中国の人にも分かると思います。しかし、しっぽに何か付いたもののしっぽ（韻尾）をカットしたり、しっぽを改めて音節化したりしたような音仮名の使い方は、中国語しか知らない人には無理だろうと。

それから、音仮名・訓仮名、音を基にしている・訓を基にしていると日本の学者は区別するのですが、例えば「たびやどりする」という表現がある。「多日夜取」と表記されています。普通、これは「たびやどり」と訓まれておりますが、「多」は音、「日」は訓、「夜」は音、「取」は訓というふうに、音・訓・音・訓です。その音の箇所が中国の人に分かるかということ、そんなことはない。音仮名にしる、訓仮名にしる、いわゆる万葉仮名として使われているようなものは、非常に日本風な書き方です。そういうことが言えると思うのです。

万葉仮名は日本風な書き方だということですが、橋本進吉に「万葉集は支那人が書いたか」というのがあります。歌以外の部分は、すべて漢文で書かれている。では、歌の部分

はどうかというと、歌の部分は漢字の正用と仮用を交えた書かれ方をしている。これは全部漢字で書かれているけれども、支那人が読んでも意味が分からず、日本語にもならない。これは日本語を映したものであるから、『万葉集』は日本人が書いたと。訳の分からない理屈ですが、そういうことがあります。

ともかく、万葉仮名といいますと、音仮名とか訓仮名に関係なく、ああいったものは日本風な書き方なのです。といいますと、国語学その他の方が、そうではないとおっしゃる。それはおっしゃってよろしいのですが、ともかく、そういった書かれ方は日本風なものだと思うのです。

だから、初めから言っていますように、『日本霊異記』のどこに日本語があるかということです。歌なんかがごちゃごちゃと書かれているあの辺りが、どうも日本語だろうということです。

ところが、『日本霊異記』の文章を言うときに、「和習」ということがよく言われます。日本風な臭みといいますか、習慣が和習。ただ、どこが和習かというのは、よく分からないところがあります。

昔、東大の国語学の築島さんが『日本霊異記』のこの例は、中国では、こういうふうには言わない。日本では、こう言う」というふうに関かに書いた時に、入矢義高さんが「ちょうど逆だ。中国語で言わないというほうが言っているんだ。築島さんが『これは中国語ではない』と言っているほうが中国語っぽいんだ」と。そして、その最後に「築島さんの漢文には和習がある」と書いてあった。だから、うっかり「和習がある」と指摘しても、非常に難しいものです。

私は、基本的な和習というのは次のようなものだと思います。

①文章を短くすることに価値を見出さない。

たらたら書くのは和習です。吉川幸次郎さんの『読書の学』をご覧になれば、このことが少し書かれています。

それから、

②同じ表現の連続を嫌わない。

これは和習だと思います。だから、古文辞学派の連中が漢訳経典、仏教経典に難癖をつけて、「これは悪い文章だ」といった理由の一つは、同じ言い回しが何遍も出てくるということです。

それから、

③「～だから」といった論理的な脈絡の明示を好む。

これも和習だと思います。中国語は、もっとぼつぼつと書かれていて、関係がよく分かりませんが、日本語は、しきりに「だから」とか「そして」とか、いちいち言います。だから、文章が長くなるのです。論理的な脈絡の明示を好む。

それから、

## ④文章のリズムを重視しない。4字句を基本としない。

そして、

## ⑤典故を重んじない。

これは、やはり和習だと思います。自分の目の前にある文章の奥に、もっと歴史を持ったというか、もっと幅の広がりを持った世界が広がっていることを予想させない文章を書くのが日本人の特徴であって、典故を重んじない。

ここに5点あります。数え上げれば、もっとあるでしょうが、基本的な和習は、ここだと思うのです。この五つが基本的な和習です。だから、細かい句単位とか文章単位で見て、中国語としてどこもおかしくないような書き方なのに何か変だというのは、大体、今、言ったこの5項目のどこかが関係している場合です。句単位、文章単位でどこにも疑問がない。

どうも国語・国文の方は、ヨーロッパの文法で言います目的語なんか動詞よりも前にありますと、「それは和習だ」と。そんな馬鹿なことはない。そこを和習と言う妙な方がおられますが、そういうことはありません。ともかく、そういう基本的な和習があって、そのうえに文章の措辞といいますか、文字の置き方の面の和習がある。

ところが、先程も松尾先生のお話がありましたが、『日本靈異記』をわーっと見ましても、どこが日本風なのか中国風なのか、私はよく分かりません。ともかく「こういった所は日本風と言って大丈夫だろう」と思われる所を引きました。

私は、この中巻第3縁を「率母聞之（いざ、ははきけ）」と訓みましたけれども、この「率」の字を「いざ」と訓むのは日本風な使い方でしょう。だけど、これは、ある催しにお母さんを連れて行って、お説教を聞きましょうということですから、「いざ、はは」ではないかもしれません。「ははをみてきかん」、お母さんを連れて行って聞きましょうという意味で、「いざ」なんて訓まないのかもしれませんが。あるいは、「いざ」という訓がありますけれども、これは「いざなふ」という動詞として訓むべきものかもしれません。ともかく「いざ、ははきけ」という訓みをしますと、この「いざ」の用い方は日本的です。

それから、「令盗絹衣（かとりどころもをぬすましめ）」（上巻第34縁）という例があります。絹の衣を盗まれてしまったというときに、「盗ま令め」と「令」の字を使う。これは日本風だと思うのです。しかし、軍記物なんかでは、弓を射られたというのを「射させた」というふうに使役に使うのですが、そういったことの古い例かもしれません。ただ、この「令」というのを中国では受け身に絶対使わないかということ、意味的に使いそうな気がしますから、これが日本風かどうかは分かりません。

次に、「たまふ」ばかりが出てきますが、私が新日本古典文学大系で訓んだような訓みで訓みますと、日本風に聞こえます。「一衣者、贈我中男貺也（ひとよそひのころもは、わがなかのこにおくりたまへ）」（中巻第3縁）。「貺」という字を「たまふ」と訓みます。「おくりたまへ」と補助動詞的に訓みますと、いかにも日本風に聞こえます。

「一衣者、贈我弟男貺也（ひとよそひのころもは、わがおとのこにおくりたまへ）」（中巻第3縁）。「願免罪貺（ねがはくはつみをゆるしたまへ）」（中巻第3縁）。「免我擯返貺（われをゆるしておひかへしたまふ）」（下巻第36縁）。「願罪脱賜（ねがはくはつみをゆるしたまへ）」（下巻第6縁）。この「賜」という字も含めて、こういう所に「たまふ」という字が出てくると、変に日本風に聞こえるのですが、そうでもないのかもしれない。補助動詞的に訓むことは間違いなのかもしれない。訓読を変えるといえますか、意味的な取り方では、「おくりたまへ」ではなしに「おくることをたまへ」という感じなのかもしれません。「わがなかのこにおくることをたまへ」と。要するに、訓読ではなしに意味的にです。「わがおとのこにおくることをたまへ」。私にしてください。「ねがはくはつみをゆるしたまへ」。願わくは免罪を私に賜え。罪を許すことを私に賜え。そういう意味なのかもしれません。そうしますと、「貺」や「賜」の用い方が変ですけれども、これは日本語が反映しているわけでもないということが言えると思います。

その次に例としてあげましたこれはどうなのか。「著身脱衣（みにきたるころもをぬきて）」（中巻第3縁）とか、「繫像引繩（みかたにかけたるなはをひき）」（中巻第34縁）という例がある。これの漢字を見ますと、動詞が変な位置にあるのです。「脱」という字は、本当は上にあったほうがよかろうと思う。「引」という字も、上にあったほうがよかろうと思う。そういうものが、こういう所に出てくる。

ところが、日本語は別に不自然なことはない。「みにきたるころもをぬきて」。「みにきたる」が「ころも」を修飾しないような漢字の並び方になっているのがおかしいのです。だから、変に日本風だなという印象を受けたので、リストアップしました。

この『日本靈異記』を書いた景戒のほかの箇所の記事を見ますと、「視於著大領之衣妹（だいらやうにきせたるころものうるはしきことをみて）」（中巻第27縁）とか、「脱著黒衣（きたるきたなきころもをぬきて）」（中巻第34縁）とか、「引於繫彼神棚之繩（そのかみのこむらにかけたるなはをひきて）」（中巻第21縁）といった文章が見えますから、もしこの人が同じ意味のことを書くのだったら、「脱於著身之衣」とか「脱著身之衣」といった書き方もできそうだし、「引於繫像之繩」とか「引繫像之繩」という書き方もできそうです。

それをなぜしなかったか。一つの理由は、4字句にするためであろう。しかも、「身に著たる」の「身」を抜かさない。「像に繫けたる」の「像」という言葉を抜かさない。そうすると、こんな変な書き方になったのかなという気はします。

ともかく、『日本靈異記』は、文字遣いの点で日本語を反映しているのかもしれませんが、していないのかもしれません。ただ、漢字の音を表すための文字の使い方は、日本風な字音を使っておりますから、日本風なものだということが言えると思うのです。

そういうふうに、『靈異記』を通じて日本語っぽいものをちらちら見ることができるのですけれども、それはどうも『日本靈異記』の問題ではなしに、当時の常識の問題であって、「こういった音を表すには、この字を使う」という同時代的なリストの問題だと思うので

す。それから、「こういう言い方は、こういうふうを書くんだ。こういうのは、こういう文句を使うんだ」という、われわれの語学の参考書みたいな問題であって、『靈異記』固有の問題とは、ちょっとはずれたところがあるのではないかという印象を受けます。もうちょっと『靈異記』そのものにかかわった日本語、中国語ではなしに日本語の文章なのだということを言うために、日本語と『靈異記』の中国語には、もっと本質的なかわりがあるのだということを申し上げようとして、今までが大体前振りのお話です。これからが本筋の話になります。

実は、われわれが国語史の本を読みますと、何か変なのです。中国語とといいますか、漢文と日本語との関係が……。日本語がどこにあるかということで、国語学者は皆さん、漢文の出来損ないの所に日本語を発見しているのです。だから、漢文がうまく書けない人が変に日本語の散文の祖みたいになされて、偉い人みたいになっている。ちゃんとした中国文が書けない人のほうが日本語に対する自覚が深かったとか、日本語の歴史にとっては非常に重要な位置にあるということをも主張しているのではないかと思われるほど、出来損ないの漢文の中に日本語の散文の原型を発見している。そういうことが多いのです。ほんとうにそうなのかなと思うのです。

例えば、ここに『日本靈異記』がありますが、この書物が「しっかりしたまともな漢文であって、どこにも破綻がない、中国人が読んで『ああ、なるほど』と言う、しっかりした漢文であって、しかも、歌の表記も音仮名・訓仮名が混在するような記し方ではなくて、中国人にもじゅうぶん分かるような文字遣いで発音が表記されていたもの」であった場合、初めに言いましたように、中国人旅行者が日本へやって来て、日本の歌とか日本のお話を記録したものと、現に今、われわれの目の前にある『日本靈異記』とは、どこが違うかというところですよ。要するに、出来損ないの中国語、日本風な中国語の中に日本語を発見せずに、日本語の散文を考えていく材料は、もっと別なところにあるのではないかということをお願いしたいと思うわけです。

上巻第2縁の訓読をあげておきました。実は、新日本古典文学大系の私の訓読と、『日本靈異記』を訓み下したほかの方の訓読とでは、基本的な立場の相違があります。

どういう相違かといいますと、例えば小学館から出ております日本古典文学全集の凡例を見ますと、「命終」という言葉があります。命が終わるという「命終」という言葉は、お経なんかには日本人が仮名を振ったり、記号を付けたりして訓み下した資料では全部音読されている。「命が終わる」とは訓まれていない。「みょうじゅう」と音読されてしまう。凡例とといいますか、解説には「だから、音読する」と書いてあるのです。

私は、そんなことはおかしいと思います。「音読する習慣がありましたから音読します。訓読する習慣がありましたから訓読します」というのでしたら、『日本靈異記』はほとんど訓読できません。訓読する習慣どころではない。見たことのない文字の並びがいっぱい出ておまして、訓読の習慣なんていうのは確定できません。音読は、習慣の確定ができな

くても、漢字ですから、まずは音読したに決まっているのです。だから、全部音読して、それに何の意味があるかという、あまり意味がない。

私の訓読文はどういうふう書いてあるかという、新日本古典文学大系の『日本霊異記』の凡例には、「景戒の同時代人の視点での訓読文を目指した」と書きました。もっと説明した所があります。1988年12月号の岩波の『図書』に書いたことがあります。それにはどう書いたかという、「過去の時代の言葉を用いて漢文を訓読するということは、その人がその漢文をどのように理解したかということをも擬古文で表現するということである」と書いた。

だから、私の訓読文は、私が『日本霊異記』の文章を理解し、その理解したことを当時の人に伝わるような日本語の文章で表現すればどうなるかという文章なのです。「こういうふうに訓まれていた」という習慣も、多少は気にしますが、あくまでも擬古文といえますか、私の理解を表現したものです。だから、こういう文章が漢文の背景にあったわけではありません。この漢文の意味を取って、『日本霊異記』が書かれた時代の人に「こういった内容ですよ」と示すには、こういった文章で話せば示せるだろうといったことです。

この『霊異記』の話をごっと読んでみます。

きつねをめとしてこをうましむることのもと だいに むかしきむめいてんわう  
[これしきしまのかなさしのみやにくにをしすめらみことあめくにおしはらきひろにはのみことなり]のみよに、みののくにおほののこほりのひと、よきをみなをめぐせむとしてみちにのりてゆく。ときにひろきののなかによきをみなにあふ。そのをみな、をとこにこびなつく。をとこめかりうちていはく「なにすれぞゆくよきをみな」といふ。をみなこたへていはく「よきをとこをまがむとしてゆくをみななり」といふ。をとこまたかたりていはく「わがつまとならむや」といふ。をみなこたへていはく「ゆるさむ」といふ。すなはちいへにゐて、とつぎてすむ。このころはらみてひとりのをのごをうむ。ときにそのいへのいぬもしはすのじふごにちにこをうむ。そのいぬのこ、いへのとじにむかふごとにいのごひにらみほゆ。いへのとじおびえおそり、いへぎみにつげていはく「このいぬをうちころせ」といふ。うれへつぐといへどもなほころさず。きさらぎやよひのころほひに、ねんまいをまうけてつく。ときにそのいへのとじ、いなつきめらにけんじきをあてむとしてからうすやにいる。すなはちそのいぬのこ、いへのとじをくはむとしておひほゆ。すなはちおどろきさわきおぢ、きつねになり、まがきのうへののぼりてゐる。いへぎみみていはく「なむちとわれとのなかにこをうむがゆゑに、われはなむちをわすれじ。つねにきたりてねよ」といふ。このゆゑにをひとのことばにしたがひてきてねき。このゆゑに [なづけて「きつね」といふなり]。ときにそのめくれなるのすそぞめのもをきて [いまのつきもなり] きび、もをすそびきていぬ。をひといぬるすがたをみて、こひうたひていはく [「こひはみ

なわがうへにおちぬたまかぎるはろかにみえていにしこゆゑに」といふ。このゆゑにそのうましむるこそ、なづけて「きつね」といふ。また、そのこのかばね、きつねのあたひをおふなり。このひとつよきちからあまたあり。はしることはやくしてとりのとぶがごとし。みののくにのきつねのあたひらのもとこれなり。

こういう文章です。要するに、キツネと人間との異類婚と言われるジャンルの説話です。三乃の国の大乃の里の男が、良い妻を手に入れようと思って旅に出た。そこで、いい女に会った。女は男のことが非常に好きな様子で寄ってくる。そこで、男はウィンクをしたりして、「おまえは、いったいどこへ行くのか」と言うと、女は「私も、いい男を探しているのよ」と言います。「じゃ、俺の妻にならないか」「分かりました」と言って、女は男の家へ行って結婚する。

そして、男の子が生まれた。その男の子が生まれた日は書かれていませんが、その家では12月15日に犬が生まれた。犬は、その女を見るたびに吠える。だから、女は恐れる。そして、女は自分の夫に、この犬を殺せと言うのですけれども、男は、なかなか殺さない。

ところが、年米といいますが、政府に出すお米を舂いている場へ女がやって来ると、犬がその女を追い掛ける。すると、女はびっくりしてキツネの姿になって、籬の上にちょこんと座る。そうすると、夫が「おまえと私との間には子供が生まれたんだ。だから、私を忘れずに、いつもやって来て寝なさい」と言うのです。そこで、女は夫の言葉に従って、やって来て寝た。やって来て寝たのだから「来つ寝」と言うのだと。そして、女は、すそを赤く染めた裳を着て去っていった。夫は、女の去っていく姿を見て歌を歌った。

そして、生まれた子は「岐都禰（きつね）」と言う名になった。岐都禰は「狐直」という姓（かばね）をもらった。この子供は非常に大きな力があって、飛ぶように走ることができた。そういう話です。

「来つ寝」とありますが、実は、ここに日本語がある。この話を理解するためには、「来」という字が「き」であることが分かなければならない。「来て寝なさい」と言った。「来る」が「き」であって、「寝る」が「ね」であることが分かなければ、何の意味もない話です。だから、これは漢文としてしっかり書かれていても、この話の根本には日本語が必要なのです。「来る」ということは「き」だ。「寝る」ということは「ね」だ。そして、あの動物は「キツネ」と言う。少なくとも、この三つの知識が必要です。

しかも、中国人旅行者がやって来て、こういった説話を書いたら、普通、このあとに、「日本では『来』ということ、『き』と言う。『寝』ということ、『ね』と言う。『狐』のことを『きつね』と言う」と必ず書きます。書いてあれば中国語の文章ですが、書いていない。書いていないということは、これを読む人も日本語の知識を当然持っているものだとしてこの説話が書かれたのです。少なくとも、「来る」というのは「き」であり、「寝る」というのは「ね」であって、動物の名前はキツネであるという三つのことを説明しなくても分

かる人を読者として書かれた文章です。だから、中国人旅行者が書いたにしても、中国人相手に書いたわけではない。読者として日本人を相手にしている。

それから、『万葉集』を引いておきました。長忌寸意吉麻呂の歌8首ですが、そのうちの3824「さし鍋に湯沸かせ子ども櫛津の檜橋より来む狐に浴むさむ」という歌を書いておきました。この歌の由来が『万葉集』の中にあります。みんなが飲んでいた時にキツネの声が聞こえた。そこで、いろんなもののうちの一つとして、キツネの声を含み歌を作れと言った。お題話といますか、そういうものを作らされた。そのキツネの声を含んだ歌が「檜橋より来む狐」で、「来む」と言った。キツネがコンと言った。だから、万葉の時代の人は、キツネの声と言えば「コン」と。キツネはコンと鳴く。

今、言いました『日本霊異記』のキツネの話の背景には、キツネは「来む。来ましょう」と鳴くものだという知識があるのではないかと。男が「じゃあ、来て寝なさい」と言った。そのあとに、普通はどうするかというと、女が「はい」と同意する。その女が同意する声がかかれていない。書かれていないでしょう？書かれていないけれども、キツネは「来む。来ましょう、来ましょう」と鳴く動物なのだとすることを前提として、この話全体が成り立っているのだと。

以前、こういう指摘を『古文表現法講義』という本に書いたのですが、だれにも研究書だと思ってもらえないのです（笑い）。平安時代の物語をどうすれば作れるかというマニュアルだと思っている方が多いです。あれには新説をものすごくいっぱい入れたのですが、その一つとして、この説話全体は「キツネはコンと鳴くものだ。キツネは『来ましょう』と鳴く動物だ」という常識が前提となっている、と書きました。

同じような例ばかりを言いますと馬鹿にされそうなので、ちょっと変わったことを申しませんが、上巻第34縁、これは、絹の衣が泥棒に盗まれ、その衣が風に吹かれて鹿の所へ飛んで行って、鹿がそれを持っていったという話です。『日本霊異記』を読んだある読者の注（いわゆる「訓釈」）には、絹のことを「可止利」と書いてある。そうすると、鹿は「か」ですから、「かとり」を「か」が「取った」という話です。「かとり」の「とり」は念頭にはないかもしれませんが、「かとり」の衣を「か」が持っていくというのは、少なくとも「か」という日本語、「かとり」という日本語を知った人が、この話を記録したと考えたほうがわかりやすい。冷たい目でごらんになっているようですが……（笑い）。そういうことが言えるのではないかと印象を受けます。

ただ、これも先程のキツネと一緒に、日本では絹を「かとり」と言い、鹿を「か」と言い、取ることを「とり」と言う、ということは、どこにも書いていない。ですから、日本語を熟知した人の手になるものであって、読者としても日本語を熟知した人を予想して書かれたものだろうと。

その次は、中巻第8縁。これは、カニを持った老人に会う。そのカニを持った老人の名前が「尽問遐邇麻呂」と言うのです。これを「つくものかにまる」と訓むのは私だけの

説であって、原文には、この「遐」という文字がありません。だけど、上の2字は、万葉仮名的に読めば、やはり「つくも」だと思います。下が「にまる」では……。やはり「遐邇」という熟語を念頭に置いて「かに」と。「つくものかにまる」というじいさんが「かに」を持って現れたほうが説話にはふさわしいだろうということで、私は訓みました。ここも、「蟹」は「かに」と言うのだという日本語理解に基づいて書かれている説話であって、しかも「蟹は『かに』と言う」という記述が全くない。

次は中巻第11縁。十一面観音にお祈りした。また摩羅とか、そんなのばかり出てきますが、「すなはち其の妻を犯せば率爾に閻に蟻著きて嚼み、痛み死ぬ」と。なぜここにアリが出てくるのだろう。

『十一面観音神呪経』とか『覚禅鈔』を見ましても、十一面観音にお祈りする言葉は、まず「阿利耶」で始まります。「阿利耶」というのは、要するにアリア人のアリアと一緒に、尊いとか、聖なるとか、聖者という意味です。観音様にお祈りする呪文の出だしは「阿利耶」です。「南無阿利耶」。「南無阿利耶」と唱えたからアリが出てきたのだろうと思うのですが、そのことに関しては、またあとから別の所で別のことを言います。これも「蟻」という動物の日本語名を基にしたものであろうと。

次は、下巻第25縁。これは甚だ自信がない。漂流している人の話ですが、「水はなはだ荒く急し。縄絶え楫解けて潮を過ぎ海に入る。二人おのおの一の木を得て海に漂流る」と書いてある。いかだがばらばらになったので、木にしがみついて、みんな海に漂っていた。その漂っている二人が無知で、……。 「知らずして」というふうに否定で読んでいるのですが、二人は知らずに、「ただ『南無無量災難令解脱釈迦牟尼仏』と称誦へ、哭き叫びて息まず」と。「知らずして」「南無無量災難令解脱釈迦牟尼仏」と唱えたというのです。そこで助かった。

知らないで、こんな妙な長い呪文を唱えられるなんていうのは考えにくいことです。恐らくは、この漁師さん二人の日常語が偶然この呪文に似ていたのだろう。そう考えて初めて、知らずして唱えたと。そういう変に合理的な解釈で、それを嫌う方も多いと思います。そういうふうに行うことができると思うのです。

だから、その漁師さんの日常語的なものであって、しかも、この呪文に似ているのは何かといいますと、波のことは「なみ」。大体、鎌倉時代までは、「南無」は「なも」と振ってあるものが多いような気がします。 「なも」と「なみ」の音の類似。それから、波が立つというのは「さく」という動詞で示しますから、「しゃか」と「さく」。ここら辺りとの類似があるのではないかと。何か似たような言葉を探そうと思いましたが、あとは探せませんでした。

そうすると、ここにも日本語の反映といいますか、日本語が透けて見える。しかも、今までと同じように、波が「なみ」であるとか、波がおこることを「さく・さか」という言葉で表すというような記述は全然ありません。ここも、日本語を非常に知っている人間が

書き、しかも日本語を知っている人間のために書いた説話であろうということが分かります。そういうふうに日本語がかかっているような感じがします。

次に、下巻第14縁。先程言いました中巻第11縁と、この下巻第14縁の二つを同じように説明するには矛盾するところがあって、どちらを取ろうかと。結局、どちらとも言えない。赤、下げないで、白、下げない。どちらも上げたままで、下げないでおいたものですから。これは非常に変な理解かもしれませんが、『千手千眼観世音菩薩廣大円満無礙大悲心陀羅尼經』というものに収められている陀羅尼に含まれている「大悲心陀羅尼」、「千手陀羅尼」をテーマにした説話が下巻第14縁です。

ストーリー的には、越前の国の加賀の郡に浮浪人の長、要するに、住所不定みたいな印象でしょうか、そういう人の長、リーダーがいた。そのリーダーは、浮浪人を集めていろんなものに使っていた。ところが、そこに小野朝臣庭麿という人がやって来た。その人は「千手の咒」、「大悲心陀羅尼」をいつも読むのを仕事にしていた。優婆塞という立場の人間で、在家の仏教信者です。そういう小野朝臣庭麿という人がいた。それが修行をして加賀の郡にやって来た。その時に、浮浪人のリーダーが庭麿に「おまえは、いったいどこの国の人間か」と尋ねると、庭麿が「私は仏道修行をしております。普通の人間ではありません」と。すると、リーダーは、「そんなことを言うな。俺にちゃんと従え」と言って、この男を縛って打って、ああしてこうしてと使うのです。

ところが、小野朝臣庭麿は従いません。そして、庭麿は「私は、こんなに『千手陀羅尼』を大事にしていたのに、どうして『千手陀羅尼』は助けてくれないのだろうか」と言って、『千手陀羅尼』を縄でくくって、ずるずる引きずって去っていくのです。

小野朝臣庭麿という人間を打ち据えた浮浪人の長は、馬に乗って自分の家へ帰ろうとした。自分の家の門に着いて、馬から下りようとするのですが、下りることができないのです。そして、馬と共に空中に持ち上げられてしまう。そして、空中にずっととどまる。1日1夜を経て、明るる日の午（うま）の時に……。馬の話ばかりです。打たれた里も御馬河の里ですし、打たれたのも午の時です。そういった馬に縁のある記述がいっぱい出てきます。「千手陀羅尼」、「大悲心陀羅尼」を大事にしている人間を打ち据えた男が馬に乗ると、下りることができず、馬が空中にとどめられた。そして、明るる日の午の時に、空中から落ちて死んでしまったという話です。

実は、「猫檀家」という民話がありまして、猫が出てきます。檀家というのは、寺の信者の檀家です。これは、目立たないように新日本古典文学大系の注に……。目立たないように変なことをいっぱい書いてあります（笑い）。「猫檀家」という説話があります。それには、いろんなバリエーションがあるのですが、ある貧乏な寺があって、檀家がだれもいない。そこには1匹の猫が飼われている。和尚さんがあまりにも大事にしてくれるので、猫は和尚さんに恩返しをしたい。そこで、猫が一肌脱ぐ。一肌脱ぐと三味線になりますが、猫が一肌脱いで、和尚さんを助けようとする。

どのようなことをするかというと、それもいろんなことがあるのですが、最終的に、猫は和尚さんが非常に神秘的なことをする手助けをする。どういう神秘的なことかといいますと、猫がお棺の中に一緒に入ります。ある人が死ぬのですが、死んだ時にお棺が空中へ上っていく。そして、空中にとどまる。和尚さんがお経を読むと、そのお棺が地上へ下りてくる。それで、「すごい超能力の和尚さんだ」というので、大繁盛になるという話です。それは「猫檀家」というグループの昔話です。

その「猫檀家」という昔話のグループの中で、和尚さんが読むお経が「大悲心陀羅尼」であるものが、多いとも言えないですけども、けっこうある。それから、猫の名前がトラというものがけっこうある。これは何かといいますと、「大悲心陀羅尼」が最初にどう始まるかということ、「南無喝囉怛那哆囉夜哪南無阿唎𑖀」です。「阿唎𑖀、阿唎𑖀」で下りてくるのです。「哆囉夜阿唎𑖀」で「トラヤ、下りヤ」と言った。それに従ってトラの入ったお棺が下りてくるのです。「トラヤトラヤ、おりヤおりヤ」と。ここにプリントしました。「南無喝囉怛那哆囉夜哪南無阿唎𑖀」。

この「猫檀家」の昔話を知った人間にとって、『靈異記』の下巻第14縁で、「オリアオリア」という呪文を唱えた人をいじめて、馬が空中にとどめられたというのは、あまり大声で言うと、人に軽蔑されそうな内容でもありますし、どこかで言ってみたいということでもあります。新日本古典文学大系には、こっそり書いたのですが、幸いにも、だれも読んでいない(笑)。関係があるような、ないような。「下りヤ」の「ヤ」まで入れると、やはり問題があるような。しかし、空中のものに対して「下り」という言葉で示される行為を呼びかけているというのは、関係ないとは言えないと思います。

ただ、中巻第11縁と下巻第14縁は両立しにくいところがあります。この「南無阿唎𑖀」と「南無阿利耶」は同じ語なのです。同じ書物にあるのに、一方が「下りヤ」であって、一方が「蟻ヤ」である。片方だけ話をとりあげれば問題は無いのですが、両方とりあげると、どっちかがおかしいわけです。私だったらどっちを取るかといいますと、これはその時々によって心が揺れます。大抵の人は両方とも取らないのですが、両方とも取りたいところもあります。

「猫檀家」を知って下巻第14縁を見ますと、ものすごく気になると思います。これは関係があるということを正しいとする判断ですと、「下りヤ・下りる」という言葉が念頭に置かれた説話であろうということが言える。

次は、上巻第16縁。私の言うことは、だんだん怪しげな世界に入っていきましてあれですが(笑)。しらふでは聞きがたいかもしれません。実は、ここで今日お話ししていることはほとんど、新日本古典文学大系の注に目立たないように目立たないように書いてあることです。この上巻第16縁のことも書きました。

「大和国に一の壯夫有り。郷里と姓名と並に詳ならず」。『日本靈異記』で、「郷里」が分からないという書き方がされているのは、この説話だけです。何でここに郷里が書いてあ

るのだろう。大和の国です。この男は何をしたかという、「其の人兎を捕りて皮を剥りて野に放つ」。ウサギを捕って、皮をはいで、野に放ったのだったら、この人の里は大和国添上郡和邇里に決まっているではないか（笑い）。そう思うのですが、違いますか。

なぜここに爰に郷里といますか、「里に関心を寄せなさいよ」と言わんばかりに「分からないんだ」と書くのでしょうか。「分からないんだ」と書くことによって、やはり興味を持たすのだろう。そうすることで分かるかという、分かるのです。「兎を捕りて皮を剥りて野に放つ」ですから、和邇里で決まりだと思ったのですが、違いますかね。神野志先生がおいでになっているので、もう冷や汗たらたらです（笑い）。

こういったことで、結局、日本語を知っている人にとって初めて面白さが出てくるような記述がある。しかも、「日本では、これはこう言うんだ」という注記が一切ない。結局、書いている側は、読む側の人たちも日本語のワニとかキツネとかアリとかカニ、あるいは「下りる」とか「かとり」といった言葉を知っているものとして書いた。もちろん近世文学なんかでは、一般読者と精読者なんていうことを言うばあいがあります。要するに、知らなくても面白いし、知っていたらもっと面白い。案外、そういったレベルのことかもしれません。知らなくても面白いし、知っていたらもっと面白いということだったら、なおさら知っている人が読者にいることを期待して書かれたのだと。こういった妙な日本語とのかかわりが、ちらちらと見える。

今、読みましたことほど衝撃的なことではないようなことをもう少し書いておきました。中巻第34縁です。「殖槻寺」というのは何かというと、飢えがなくなる話なので、「飢ゑ尽き」と何か関係するのかなという気がします。

次、下巻第38縁は、キツネが鳴いて、虫が鳴いて、馬が死んだと。ここで鳴いている虫と同じ虫かどうかは知りませんが、『口遊』とか『袋草紙』とか『二中歴』なんかに、「しし虫」というのが出てくる。これはシシと鳴く虫だという注があるくらいなので、この虫の鳴き声を「死死」と聞いた可能性がある。前田家本の注があります。「師自夏牟之」、「しじなつむし」と読むのか、「しじげむし」と読むのか、いろんな説がありますが、「師自」という注があります。この「師自」が「死死」というイメージでとらえられていたならば、シシと鳴く虫が鳴いたので死んだと。そういう説話構成でしたら、やはり日本語を念頭に置いた説話構成と言えます。「死（し）」は日本語か、中国語かという問題もありますが、日本語を念頭に置いたものだろうということが言えます。

それから、先程のキツネと結婚した話では、キツネがコンコンと鳴いたというのですけれども、『醒睡笑』になりますと、「いなり殿は四献四献といはるる程に」と。「シコンシコン」と「シ」が付くのですが、こういう鳴き声としてとらえられているならば、キツネは「死来む。死来む。」「死がやってくる、死がやってくる」と鳴く動物だという理解もあったのか、なかったのか。こういったものは、なかなか分かりません。そういったことも、言って言えないこともなかりうと。

ただ、動物がどういう動きをしたら、どういういいことがあるとか、どういう動きをしたら、どういう悪いことがあるというのは、それなりにまた別の論理・別の信仰もあるみたいですから、日本語という言葉の問題ではないといったことも考えたほうがいいのかもできません。

それから、上巻第4縁。墓の名前が「人木墓」。これを「八木」と書くテキストもあるみたいですが、この時代は、棺おけのことを「ひとき」と言い、「人木」とも書くのです。だから、案外、そういう棺のイメージもあるのかなという気がします。

それから、中巻第5縁。撫凹村にできたお堂が「那天堂」というもの。これなんかは、「撫」という字が「なで」であるということを知らなければ、意味がない命名です。地元の人が知っていて、こういう名を付けたのを記録したというのですと、知らなくても書けますが、それだと、もうちょっと注記っぽいものが一つ要りそうな気がします。

それから、「久玖利」と言う男の妻が船を水にぐっと入れたというのです（中巻第27縁）。水に入れることを「くくる」と言うのですから、こういったものも、「くくる」という日本語を知っていたほうが面白かるう。

次は、「牟婁」沙弥が「室」にお経を置く（下巻第10縁）。あるいは「猴」聖が「舍利」菩薩（下巻第19縁）。「しゃり」と「さる」の音の類似。

要するに、先程からくどくどと、確かそんなことから怪しげなこと、怪しげを通り越して絶対間違いであろうと皆さんが思いになっていること、さまざま幅広く申してきましたが、「来る」ということが「き」であり、「寝る」ということが「ね」であり、「来つ寝」という動作は「キツネ」だと。キツネはコンコン、「来ましよう、来ましよう」といって鳴く動物であるということ。そして、絹のことを「かとり」と言う。鹿のことは「か」と言う。鹿が取っていくことを「かとり」ということ。あるいは、カニという動物は「かに」と言う。カニを持ってきたじいさんが「つくものかにまる」だったら面白いなと。十一面観音のお祈りの文句の最初が「アリヤ」というから、アリが出てくるのは関係がある構成かもしれない。あるいは、漁師さんが知らずに南無何たらかんたら釈迦何たらかんたらと唱えたのは、波がさくどうたらこうたらという日本語と関係があるのかどうか。あるいは、「大悲心陀羅尼」に「南無オリヤ」とあるのと、馬がなかなか下りることができないのを下ろす話。あるいは、大和の国の里の名前が分からない男性がウサギを捕ってきて、皮をひんむいて野に放った。きっと和邇の里だろう。この動物をワニと言うとか。

そういったことは、日本語を知っていて初めておもしろく読めることです。初めてというと、知らなくても、だれも鑑賞に困らないのではないかと。だけど、先程、一般読者と精読者と言いましたけれども、そういうことなのでしょう。一応の意味は通るけれども、やはりそこら辺りの面白さを狙った説話構成であったのではないかという印象を受けます。そこに、また日本語というものが出てくる。

だから、最初に言いましたように、中国語の文章の下手な所に日本語を発見するのでは

なしに、いかに正確な、ミスが一つもない中国語として説話が書かれていても、その根本のところ日本語が関係しているのだと。そういう日本語と中国語の文章とのかかわり方で、この『日本霊異記』があるのだと思っています。

そして、資料としてプリントしておきながら説明をせずにきた所があります。小子部栖軽の「栖軽」という人名は、「軽」と言う土地に住んでいるという意味合いを持たせた表記だと思うのですが、それが「軽諸越の衢」に登場する（上巻第1縁）。これは文字面そのもので関係があるわけですから、日本語は関係ない。中国語の字面として、「軽」という字がどのように読まれようが、「栖軽」という名前がどのように読まれようが、日本語でなく音読みされようがされまいが、ともかく字面のうえで既に関係があるという書かれ方です。

次に、どくろの目の穴の所に竹の子が生えていた話（下巻第27縁）。それは窟穴国郷の穴君と言う人が関係している。それも、結局、「あな」という日本語に関係なくても、「穴」という文字で書かれているということにかかわってのことです。音読みする地名であってもいいのです。ともかく、そういう文字で関係されているので、似ておりますけれども、これは先程来、言っていることとは違う問題だろうということです。

ということで、思い出した時に言わないと忘れますから、説明をせずにきた所のことを言いました。

さて、「女人悪しき鬼に点され食はるる縁 第三十三」。中巻です。それを挙げておきました。先程、中国の旅行者が日本の歌とか日本の説話を記録した場合、音をどのように表記するかというパターンを【1】、【2】、【3】に挙げましたが、歌とか、そういうものではなしに、ごく普通の日常会話を記録して、しかも、表音文字風に漢字を使わずに、結果としてそれに似たような効果を表すような表現がされているものがあると。それが「女人悪しき鬼に点され食はるる縁」です。読みます。

「聖武天皇の世に、国挙りて歌詠ひて謂はく『なれをぞよめにほしとたれ あむちのこむちのよろづのこ 南无南无や 仙さか文さかも酒持ち のり法まうし やまの知識あましにあましに』といふ」。この歌には、いろんな解釈があります。これは私の解釈です。こうすればどうにか切り抜けられるだろうという緊急避難みたいな、やっとの思いの解釈です。

「爾の時に大和国十市郡菴知村の東の方に、大に富める家有り。姓は鏡作造なり。一的女子有り。名けて万の子と曰ふ」。鏡作造の所に女の子がいた。万の子と言う。「いまだ嫁はず、いまだ通がず」。結婚しなかった。

「面容端正し。高き姓の人伉儷ふになほ辞びて年祀を経」。昔の玉の輿、今のセレブ婚を狙っているのですが、「なほ辞びて年祀を経。爰に有る人伉儷ひて忿々物を送る。彩帛三車なり。見て軀の心もちて兼ねてまた近き親ぶ」。物に「うわあ」と感激するわけです。「語に随ひて許可し、闔の裏に交通ぐ」。男が通ってきて、二人は寝室で過ごします。

「其の夜闔の内に音有りて言はく『痛きかな』といふこと三遍なり」。「痛い、痛い」と

三遍、言った。「父母聞きて相談ひて曰はく『いまだ効はずして痛むなり』といひて、忍びてなほ寐」。両親も静かに寝た。

「明日の暁に起き、家母戸を叩きて驚かし喚べども答へず」。「朝ですよ」と呼んだけれども、答えがない。「怪びて開き見れば、ただし頭と一の指とのみを遺し、自余はみな噉はる」。食い残しがあるのは鬼が食べた証拠だと、いろんな人が言っています。

「父母見て、悚慄り惻惻て、娉妻に送れる彩帛を喰れば、返りて畜の骨と成る。載せたる三の車は、また返りて呉朱與木と成る。八方の人聞き、集り臨り見て、怪びずといふこと無し。韓篔に頭を入れ、初七日の朝に、三宝の前に置きて齋食をす。すなはち疑はくは、災の表まづ現れ、彼の歌は是れ表ならむ、と。或るいは神しき怪なりと言ひ、或るいは鬼の啖ふなりと言ふ。覆し思ふに、なほし是れ過去の怨なり。斯れまた奇異しき事なり」。

ごちゃごちゃと申しましたが、どこに注意したいかという、女が叫んだ「痛きかな」。「有音而言『痛哉』三遍」。私は、これを「痛きかな」と訓みましたが、実は中巻第10縁の痛脚村の起源説話では、足が痛いときには「あな、あし」と訓んでいます。それから、下巻第16縁では「あな、ち」、下巻第27縁は小野小町みたいですが、「あな、め」と言う。「痛」という字の下に何かものが付いたときは、そこが痛いのですから、私は「あな、～」というふうに読みました。

ただし、下に何も付いていない場合は、「痛きかな、痛きかな」で訓んだのですが、よく考えると、ここの「痛哉」も、案外これは「あなや」かもしれない。もしこれを「あなや」と読みますと、『伊勢物語』の第6段の「鬼はや一口に食ひてけり。『あなや』といひけれど」につながっていく。これは塗籠本では「あゝや」とあります。上代には「あや」という言葉もあります。

そういうふうに考えますと、『出雲国風土記』で、目一つの鬼が男を食べたと。男は、竹がそよぐのを見て「あよあよ」と言った。だから、その地を「阿欲」と言う。この「あよ」が「あや」とか「あゝや」とか「あなや」をさかのぼった非常に古いところにあるのだろうと。

そういう歴史を作ろうと思いましたが、「あよ」の字の仮名遣いにちょっと難しいところがあります。だから、「地名起源説話は必ずしも上代特殊仮名遣いによらない部分もあるのではないか」という言い訳を付ければ許されるかもしれないなと思いつつながら。「あよ」という言葉。「あよ」の「あ」だけでもいいです。塗籠本の「あゝや」、上代の「あや」、『伊勢物語』の「あなや」の間に『靈異記』の「痛哉」という字が入るのではなからうか。

そうしますと、こういうちゃんとした散文であっても、こういうちゃんとした日本語の表記の仕方があるんだと。発音記号風な表示を使わなくても、やってやれないこともあるのだろう。逆に言いますと、下手な中国語から日本語の散文の祖を発見していくのではなく、ちゃんとした中国語のところから、その背後にある日本語の散文（日常会話の記録はまさに「散文」でしょう）を発掘していくのも大事ではないかなと思うわけです。

ごちゃごちゃ申しましたが、プリントしていて言わなかったことがあります。上田秋成の「吉備津の釜」を引用しました。ここで、男が「あなや」と叫んでいます。その叫び声は非常に擬古的な叫びであったということです。奈良女子大で出しております『伊勢物語』の注釈を見ますと、これは非常に擬古的な叫び声である。この「あなや」という叫びは、『伊勢物語』以降はあまり見られません。そこで、「吉備津の釜」の目指すところ、そういったものを考えることができるのではないかとということで申しました。

あちこち非常に怪しげなことにまでわたる妙なお話を致しましたが、要するに、古代日本語の散文の祖みたいなものを下手な中国語、誤った中国語の所に発見するのが国語史の仕事です。しかし、そんな馬鹿なことはありません。誤った中国語を書いた人のほうが日本語の自覚がしっかりしているなんていう馬鹿なことはあり得ません。ちゃんとした漢文の世界を支えている日本語があるのだということを申しました。ご清聴どうもありがとうございました。(拍手)

**坂本** 本日は大変暑い中、長時間にわたりましてご清聴いただきまして、ありがとうございました。この建物は、重要文化財ということで、いろいろ規制がございまして、空調もなかなか利きにくい。椅子も、もっと快適な椅子があるのでしょうかけれども、こういう椅子でなくてはいけないのです。そういうことで\*\*\*\*しんどいかたちで\*\*\*\*。出雲路先生の大変含蓄のあるお話で、皆さんそういった温度のことや椅子の痛さを忘れて\*\*\*\*ではないかと思えます。出雲路先生に、もう一度拍手をお願いします。(拍手)

これもちまして奈良女子大学21世紀COE公開講演会を終了致したいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

(終了)